

超高層50年

わが国の超高層時代の幕開けとなった霞が関ビルディング（以下、霞が関ビル）が1968（昭和43）年4月12日の竣工から今年で50年を迎えました。

1960年初頭まで、地震国日本では高さ31mを超えるビルを建てることができませんでした。これは1919（大正8）年制定の市街地建築物法（現在の建築基準法）の制限によるものです。一方、過密化が問題となっていた都心では、土地の高度利用や都市防災などの観点から、ビルの超高層化に対する期待が強くなっており、1963年に高さ制限が撤廃されました。

当社では、遠からず超高層ビルが建築される日が来ることを予想し、技術研究所の強化拡充や大型コンピュータの導入などを行ってきました。なかでも耐震構造の世界的権威である東京大学名誉教授・武藤清博士を副社長に迎え、柳が風を受け流すように、地震時の振動が建物自体に破壊力として伝わらないようにする「柔構造理論」を確立したことが、高さ147mという空前絶後の超高層ビル実現の推力になりました。

1965年3月、起工式が挙行され工事がスタート。超高層ビル建設という新分野開拓に加え、短工期など厳しい条件下、関係者は一丸となって切磋琢磨し、新技術や新工法を開発しました。セルフクライミング方式タワークレーン、工場加工した資材を現場で組み立てる各種のプレハブ工法、特殊なデッキプレート床工法や大型H形鋼などです。これらは改良されながら今日でも採用されています。気象データをもとに、高所作業時に風雨から受ける影響を考慮に入れた工程管理も、未だに超高層ビルの建設工程の基本になっています。こうした事実は、霞が関ビルを実現した技術や工法の高い完成度を物語っています。

1968年4月。着工から約32ヶ月という短工期で日本初の超高層ビル「霞が関ビルディング」が完成しました。就労人

数延べ74万人、延べ労働時間603万時間、構造理論の確立やコンピュータの発展、新技術の研究・開発はもちろん、何よりも幾多の障害、困難がありながら経営者から作業員まで「日本で初めて超高層ビルを造るのだ」という強い意志が霞が関ビルには込められています。



完成当時の霞が関ビル



現在の霞が関ビル

霞が関ビル竣工から50年を迎えた2018年。同ビルを建設した三井不動産が計画を進めてきた大型複合施設「東京ミッドタウン日比谷」が3月29日にグランドオープンしました。地上35階、地下4階、延床面積約18万9,000㎡でオフィスや店舗などで構成されており、当社が開発した世界最高の制震効率を達成する新世代制震装置「HiDAX-R」を採用し、高い耐震安全性能と事業継続性を提供しています。

当社は“超高層の鹿島”と称された超高層のパイオニアとして、安心できる暮らしと事業活動の持続的な成長を支えるため、これからも技術開発を続けてまいります。



グランドオープンした「東京ミッドタウン日比谷」